

工場ルポ

東洋合成工業 千葉工場

東洋合成工業(株) (東京都台東区) は、ナフトキノン系感光材、光酸発生剤(PAG)などの感光性材料や樹脂、高純度溶剤などを手がけるフォトレジスト向けの原料サプライヤー。2025年で創業71年目を迎える同社は、感光材分野においてグローバルでトップシェアを有しており、半導体市場の拡大に応じて近年急成長を遂げてきた。その成長を支えるのが主力拠点の千葉工場(千葉県東庄町)だ。千葉工場では近年、開発・製造双方で機能拡充に向けた大型投資を実施しており、今後のさらなる成長に向けた布石を着々と打っている。

■90%以上を千葉で生産
同社は売り上げの90%

高品質レジスト原材料を生産

以上を千葉県で生産、世界に供給しており、千葉工場のほか、市川工場や



第4感光材工場



感光材開発分析棟

高浜油槽所、香料工場などの生産拠点のほか、印西市に感光材研究所を構えている。

千葉工場は感光材の製造を目的に、1988年に千葉東洋合成(株)として設立。翌89年に第1工場が完成した。その後、事業規模の拡大に伴って工場を増設。従業員も千葉

工場全体で590人(正社員)と2010年以降大きく人員が増えていく。

千葉工場では20年以降、大型の投資プロジェクトを進めており、20年10月に第4感光材工場のI期工事、24年5月に感光材開発分析棟、24年9月に第4感光材工場のII期工事が竣工。今後のさらなる市場拡大に備えた戦略的な設備投資を積極的に進めている。

林孝雄上席執行役員も「II期工事に着手するのは当面先と思っていたが、市場拡大のスピードが早く前倒しで工事に着手した」と明かす。17年に建設着手したI期工事では、先端レジストの需要拡大に対する確度が高くなかったが、II期工事では顧客からの旺盛な需

する材料をレジストメーカーがそれらをフォロミユレーションしていく。製造面で、同社にとって大きな変化となっているのが工程の複雑さだ。「Krf世代の材料では数日で済んでいた製造工程が、先端向けでは2〜3カ月かかるものがある」(感光材事業部長の

生産のフレキシビリティを保ちながら需要に応じていく考えだ。

に努めている。同社の業績は半導体市場の拡大に伴って拡大を遂げ、24年度(25年3月期)は売上高387億円を記録。現在、26年度(27年3月期)を最終年度とする5カ年の中期経営計画が進行中で、第4感光材工場は中期目標達成に向けた重要拠点と位置づけられている。

開発・製造双方で機能拡充

第4感光材工場は、先端半導体向け材料の生産能力を従来に比べて1・8倍に引き上げるための投資で、総投資額は約120億円。I期工事はナフトキノン系感光材および先端向けポリマーの生産を手がける。

要を背景に、大型の製造設備(反応釜など)を配備している。

平澤聡美取締役(左)という。さらに「(Arf以降は)スタンダードな型番がなくなっており、各社各様のオリジナルデザインになっている」(同氏と

が図れ、平澤氏も「ようやく念願がかなった」として、感光材開発分析棟が果たす役割に期待を寄せる。棟内の分析室や実験室には、多数のクロマトグラフやICP-MS(質量分析計)などが完備されており、次世代に向けた研究開発およびきめ細かな製品の品質管理

に努めている。同社の業績は半導体市場の拡大に伴って拡大を遂げ、24年度(25年3月期)は売上高387億円を記録。現在、26年度(27年3月期)を最終年度とする5カ年の中期経営計画が進行中で、第4感光材工場は中期目標達成に向けた重要拠点と位置づけられている。

II期工事は先端半導体向けのPAGおよびポリマーの生産に特化している。千葉工場長を務める

要求に応じた品質を満たす製品の製造処方をデザインする。同社はあくまでも材料サプライヤーという構えで、同社が提供

顧客のフォークキャストも変動が激しいことから、

め細かな製品の品質管理

が特定重要物質の安定確保の一環として取り組んでいる「供給確保計画」に、同社の千葉工場、市川工場、淡路工場の投資計画が助成金対象として認定されている。投資総額は約211億円で、最大助成額は約70億円を見込んでいる。

(編集長 稲葉雅巳)

